

文化遺産を今に活かす ⑤ 史跡公園に生まれ変わった唐古・鍵遺跡

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

4月28日、ふるさと会館を会場に、第29回天理考古学・民俗学談話会が開催され、天理大学卒業生の奥谷知日朗氏（田原本町教育委員会文化財保存課）が、「遺跡整備の先にあるもの—唐古・鍵遺跡整備事業から—」と題した報告を行った。弥生時代を代表する大規模な環濠集落として知られる唐古・鍵遺跡は、1999年に国の史跡に指定され、整備事業が進められていたのが、4月17日、史跡公園がついにオープンしたところなのだ。整備事業を担当した奥谷氏の報告では、迫力のある写真をふんだんに使い、史跡公園の全容が紹介されたのだが、解説板のリード文を多国語化する作業を天理大学の関係者が手助けしたことなど、楽屋裏のエピソードも披露された。



史跡公園内の「弥生の建物広場」

実は筆者は、学生時代だった1980年代後半、アルバイトの調査補助員として、田原本町教育委員会の藤田三郎氏が指揮を取る唐古・鍵遺跡の発掘調査に参加し、奈良や京都の大学から通う仲間たちと切磋琢磨しながら、考古学の修行を行っていた。その頃の唐古・鍵遺跡は、戦前の1937年に末永雅雄氏が唐古池の発掘調査を行った当時と同じ水田風景が残っていたものの、国道の隣接地では民間の開発案件がしばしば生じ、緊急の発掘調査がその都度行われ、なし崩し的に遺跡が蚕食される懸念が高まっていた。その後、町教委の努力や地域住民の理解により、国道沿いの一等地にも関わらず、遺跡の核心部が開発から免れて保存され、この度、史跡公園の整備完成に至ったことは実に感慨深いものがある。史跡公園として整備されたのは、約350m四方の範囲（約1万㎡）だが、唐古池を挟んだ東西に弥生時代の環濠が復元され、数条の環濠がムラを囲んでいる様子がインターネットの地図でもわかるほどだ。学生時代の筆者が自分の手で泥中から掘り出した土器などを含め、出土遺物も1,921点が、今年3月9日、新たに国の重要文化財に指定された。出土資料を展示する唐古・鍵考古学ミュージアムも、半年間休館になっていたのが、6月1日にリニューアルオープンして展示の内容を一新し、重要文化財指定資料が一堂に公開された。

そこで6月3日、「唐古・鍵遺跡の周辺を歩き、蛇巻きを見る」と題して、「弥生時代の考古学」の受講生たちと現地を訪れ、新規オープンした史跡公園、リニューアルオープンしたミュージアムを見学することにした。ちょうど同日に、唐古・鍵遺跡のすぐ近くの鍵、今里の両集落で伝統行事の「蛇巻き」が行われるので、考古と民俗の両方を現地で同時に学べる絶好の機会にもなる。幸い、当日は気温は高いものの好天で、田原本駅から東に20分ほど歩き、青垣生涯学習センター内の唐古・鍵考古学ミュージアムに到着し、まず、卒業生の奥谷氏に挨拶をする。展示室は少し雰囲気変わり、文字による資料の説明が少なくなったのはやや不親切にも思われたが、実物資料そのものの美術品の価値を重視して展示する方法を採用したとのことだった。絵画土器、銅鐸を鋳造する鋳型をはじめ、存在感のあるさまざまな資料が堂々と並んでいるのは確かに見事だ。見学を行った後、昼食を済ませ、次の

目的地、国道をわたった寺川の岸辺にある鏡作神社（鏡作座天照御魂神社）に向かう。社宝として三神二獸鏡が伝わるこの古社の近辺は、他にも、鏡作伊多神社、鏡作麻気神社などが点在し、『和名抄』に「鏡作郷」と見える土地柄から、古くから金属の加工に関わる集団が拠点としていた地域だと考えられている。また少し歩き、鍵の集落内にある八坂神社に着くと、境内では稲わらで作った長い「蛇」がすでに準備され、法被姿の子供たちが出発を待っている。神職による神事が終わると、いよいよ集落内を練り歩くのだが、子供たちがかつぐ「蛇頭」は300kg近い重さがあるので、少し歩いては放り出し、それを繰り返しながら進む。今里の蛇巻きは、午後から「蛇」の作成を行うので、その様子を少しだけ見学して、最終目的地の唐古・鍵遺跡の史跡公園を目指す。

史跡公園に入る前に、新しくオープンした道の駅「レストイ唐古・鍵」で休憩を取り、のどの渇きを癒やす。国道の信号をわたり、公園入り口近くの「遺構展示情報館」では、遺跡内で発見された大型建物跡の柱穴を形取りし、実寸大に再現した模型が展示されている。大型建物に用いられた柱材は、根元部分（径60cmのケヤキ材）の実物が展示してあり、受講生たちは、このようなものが地下に埋もれていたのかと目を丸くする。ここで声をかけてこられたボランティアガイドの森口さんは、昔、筆者が発掘ボランティアをしていたときの課長さんだ。展示施設を出て、復元された環濠の土橋をわたると、一面に広がる芝生の一面に、「弥生の建物広場」として、大型建物が見つかった場所に、柱の模型が立ち並んでいる。大型建物の大きさも、環濠で囲まれた集落全体の大きさも、実際に現地を訪れると実感することができる。戦前に発掘が行われた唐古池の堤防は桜並木の散策路となり、多くの来訪者が、家族とくつろいだり、犬を散歩させたり、公園で思い思いの時間を過ごしている。公園の一面には、「弥生の林エリア」があり、発掘調査で実際に木材や花粉が確認された樹種を選んだ植樹が行われている。きっと、20年も経てば、立派な森に育つのだろう。

一日かけて、ミュージアムを見学し、史跡公園として生まれ変わった遺跡内を歩き、訪れる人々で賑わう様子を見て感じられたのは、唐古・鍵遺跡の「弥生力」を地域文化として活かすという「史跡公園活用基本方針」（2017年6月）の目標が、今のところ十分実現しているのではないかと思われることだ。その目標とは、具体的には次のようだ。①教育的・社会教育的活用として、遺跡がもつ歴史・文化的な価値を発信する。②町が誇る文化的資源として、地域アイデンティティーを形成する場として活用する。③歴史的な景観の維持と弥生の風景の再現を目指す。④唐古・鍵考古学ミュージアムや史跡公園に隣接する道の駅との機能連携による観光拠点を創出する。

幹線道路のすぐ脇にあり、立ち寄りスポットとしてのロケーションも抜群で、ランドマークあるいは地域のシンボルとしても申し分がない。来園者に親しまれる憩いの場、コミュニティの場として、住民とともに賑わいと活力のあるまちづくりを推進する、という田原本町がめざす文化遺産の保存と活用の方向性が、少なくとも唐古・鍵遺跡史跡公園の場合、うまく相乗効果を生み出しているように筆者には思われた。